

## 点描

## 北海道50年の歩み—真宗同朋会運動—

No.16

1993  
平成5年

1993年、帯広別院「開教」百年記念講演を行った平野修師(写真提供・帯広別院)

## 北海道「開教」百年

平野修師の促しを受けた同和問題検討委員会

一九九三年(平成5)、帯広別院において「開教」百年法要が勤修された。記念講演を行ったのは平野修師である。

「なるほど、この百年はご苦勞の連続だったと思います。…文化の違う人、生活様式の違う人、そういう人たちを、力をもった別の人たちが押し分けたり、又自分たちの中に無理やり入れたりすることは、これは本州は早くから始まりました。で、地理的な上からいっても北海道は、最後まで、今もって残っています。」

(『はじまりとしての浄土真宗』)  
師は百年に及ぶ歩みを讃えつつ、これを単に慶事とするのではなく、自己自身のあり方が問われるところにしか、浄土真宗のはじまりはないと言いつけられた。

この問題提起には背景がある。当初、師は講演依頼を快諾しなかった。その理由は「単にめでたいということではない。開教の背景にはアイヌの人々への侵略の要素

があるのではないか」という師の思いがあったからである。しかし、差別の問題を継続的に学んでいくことを約束して記念講演は実現した。

\*

同年、師の促しを受けて発足したのが、帯広別院教化委員会と第十七組合同による「同和問題検討委員会」(94年に同和問題学習会と改称)である。以後、年間十二回前後の会合が継続的に持たれた。委員会は「開拓・開教」の歴史を現に今生きている者の責任として学びつつ、各種研修会・講演会等

にも積極的に参加した。その内容には旧土人保護法の差別性や大谷派の千島「開教」や錦絵の検証、アイヌ民族と共に生きた和人・大

川宇八郎氏の生涯等にわたる。また、北海道ウタリ協会前理事長の野村義一氏、現理事長の笹村二郎氏(現アイヌ協会、役職は当時)や第八組本念寺門徒の小石川武美氏など、多くのアイヌ民族を訪ねた。毎年作成された報告書は六冊に及ぶ。

その内容は多岐にわたっているが、一貫しているのは「開教・開拓の功罪について親鸞聖人の教え

に照らして検証する」である。

報告書には、「大谷派として北海道の「開拓・開教」の意味が問われたのは、一九七七年(昭和52)の大師堂爆破事件である。しかし、継続的な学びの場、殊にアイヌ民族の生の声を聞くことがなかったならば、内心ではいまだに、北海道の「開拓・開教」を近代における大谷派の偉業としてのみ見ていたであろう。また、アイヌの人々が過去に対するいかりを抑えて「共生」を呼びかけている悲しみに気づくこともなかったのではないかと述べている。

また、同和問題検討委員会の歩みを総括するかたちで掲載された『身同』(同和推進本部紀要19号、98年)には、サルトル『ユダヤ人』を引用して、民族差別者の持続を確実にし、世代から世代へ伝えていけるのは、絶対多数を占める無関心の人たちであると述べる。その多数が全体に機能させている差別がある。全体の中の闇を自己一人の責任として自覚することの他に道はない、と。

この委員会の学びは、学習資料集『共なる世界を願って』に継承されていく。(速水整)